

移民が形作るタイ

—華僑・華人に着目して—

鈴木 佑 記

目 次

- 1 はじめに
- 2 中国人移民の歴史
- 3 王の血筋
- 4 頭角を現した華人
- 5 おわりに

1 はじめに

世界各地に中国をルーツに持つ人びとが暮らす。通常、中国の国籍を保持したまま移住先で生きる人を華僑、移住先の国籍のみを有して現地で生活する人を華人という⁽¹⁾。2000年時点で華人は世界161の国と地域に分布しており、総人口は約3,975万人である。そのうち80パーセント近くにあたる約3,161万人が東南アジアに集中している。その内訳は、インドネシア(1,000万人)、タイ(800万人)、マレーシア(568万人)、シンガポール(268万人)、ミャンマー(247万人)、フィリピン(120万人)、ベトナム(120万人)、カンボジア(30万人)、ブルネイ(5.3万人)、ラオス(3万人)となっている[張2009]。「海水の至る所に華僑あり」という表現があるが[cf. 根津1994; 三留1999]、実際には波が届かない内陸国にも進出していることがわかる⁽²⁾。

本稿で取り上げるのはタイである。華人人口800万人という数値は、世界で一番多く華人が暮らすインドネシアに次ぐ規模である。総人口約6,900万人中1割超が華人ということであり、少なく見積もっても10人に1人が中国から

移民が形作るタイ（シンポジウム）

渡ってきた祖先の血を引き継いでいることになる。本稿ではまず、中国人がいつ頃から海外に移住するようになったのか、また華僑・華人がどのようにしてタイで生活の拠点を築いていったのか歴史を振り返る。その上で、華僑・華人がタイでどのような社会的地位を築いてきたのか、タイの王族、それに経済的成功をおさめた人物に焦点を当てることで紹介する。結論として、中国人移民とその子孫たちによって、タイ社会の一部が形成されてきた点を指摘する。

2 中国人移民の歴史

中国人の海外移住は12世紀から13世紀に始まったといわれる。南宋が1127年に海を臨む臨安（現杭州）に首都を置き、海上交易が盛んになった時期と重なる。初期の海外移住先は近隣諸国のアジア圏であり、華商と呼ばれる貿易商人や卸売業者が主役であった〔周 2009: 24〕。13世紀から14世紀にかけて、現在のタイ領マレー半島両岸には商業港が発達しており、華商が訪れていたことがわかっている〔パン 2012: 378〕。14世紀末期（1371年）に中国で海上私貿易が禁止されたことを契機として、福建を主とする商人が倭寇となったり、また一部は密貿易をするなかで東南アジアに移住したりする者もあらわれるようになった。

アンソニー・リードが「交易の時代（The Age of Commerce）」と呼ぶ15世紀から17世紀の南シナ海では、緊密な貿易ネットワークの網が張り巡らされ、東南アジアの各地に中国人コミュニティが形成されるようになった〔リード 2002〕。1405年から1433年にかけて7回実施された、鄭和（1371-1434）を指揮官とする南海への大航海^③の同行者たちが、当時の東南アジアの様子を伝えている。なかでも興味深いのは、タイに出向いた中国人の貿易商人たちが、現地の女性と結ばれて「混血児」が増えていった可能性を読み取れる記述である。

例えば、第4次（1413-1415）と第7次（1430-1433）の鄭和の大航海に同行し、1451年に『瀛涯勝覽』を著した馬歡は、タイ・アユタヤーの女性を以下のように描写する。

ここでは、あらゆる事からはみな女がつかさどっている。王様も庶民もさまざまな事がらを、みな女に決めてもらっている。婦人の智慧は男子より勝っているのである・・・中略・・・女は中国の男と知り合うと甚だ愛し、必ず酒盛りをして歓待し、歌をうたい家に泊めてくれる。それが妻女であっても、その夫は平然として怪しがらず、「おれの女房は美人だから中国人が喜んでいるのだ」という [小川 1998: 51-56]

その他にも、16世紀に刊行された商業の手引書（現在でいうところの渡航ガイドブックにあたる）の一つ、黄衷の『海語』（1536年刊行）には、「[アユタヤーに] 奶（ナイ）街という華僑の居住区がある。・・・中略・・・この国では姓氏を持つことがなく、[同化した] 中国人ははじめは旧姓を使っているが、一、二代たつと中国姓をすてる」という記述がある [斯波 1995: 49]。つまり、華僑商人が渡航先で家族を持ち（ときに、現地の女性と性的関係のみ持ち）、その子孫が華人としてその数を増やしていったことがうかがえるのである⁽⁴⁾。

1600年頃には、ベトナム、フィリピン、タイ・パッタニー⁽⁵⁾、インドネシア・バンテンの各地で、中国人が貿易商人集団として最大規模を誇っていた。1603年のフィリピン・マニラに2万3千人、1640年代のベトナム・ホイアンで5千人、17世紀のインドネシア・バンテンおよびタイ・アユタヤーで3千人（成人男性のみ）の中国人が暮らしていたとされる⁽⁶⁾ [リード 2002: 426]。

「華人の世紀」と呼ばれる18世紀には、それまでに多くみられた貿易商人だけでなく、都市の商工業者、それにプランテーションなどの生産・輸出に関わる経営者と労働者たちが大量に東南アジアを目指した [Trocki 1997]。その土壌を築いたのは、東南アジアに進出して植民地化をすすめたヨーロッパ列強である。サトウキビやゴム栽培のプランテーション農業を導入し、錫鉱山を開発し、貿易中継地としての港を整備することで、大量の労働力が必要とされるようになったためである。ちょうどその時期、中国南部の華南地方（広東省、福建省、海南省などの沿海地域）で人口が爆発的に増加したこともあり、耕地を失った人びとが東南アジアに活路を見出したのである。その行き先の一つがタ

移民が形作るタイ（シンポジウム）

イであった。移民の子孫のなかには、王族として名を馳せる人物もあらわれた。

3 王の血筋

トンブリー王朝（1767-1782）を開いたタークシン王（1734-1782）は、潮州人の血を引くことで有名である。彼の父である鄭鏞（Tae Yong）は、広東省汕頭市澄海区華富出身であり、アユタヤーに移住した⁽⁷⁾。アユタヤー王朝（1351-1767）⁽⁸⁾時代のタイへの移民の多くは福建人であったが、鄭鏞のような潮州人も少なからずいた。中国人移民はアユタヤーの川中島東部の内と外に集住地を構え、パーサク川の両岸に広がっていた。鄭鏞はパナンチューン寺院⁽⁹⁾裏のスアンプルー運河沿いに居を構えていたといわれる [SNG and Bisalputra 2015: 56]。アユタヤー末期には中国人人口が1万人だったとされており [カセートシリ 2007: 150]、フランス人傭兵部隊やポルトガル人傭兵部隊とともに外敵（主にビルマの王朝）からアユタヤーを守る主要な戦力ともなっていた。

タークシンは「牛車商人」と呼ばれる国内を活動圏とする商人だったが、後にターク国の国主となり部隊を持つようになった。アユタヤーがビルマのコンバウン王朝に滅ぼされた後、タークシンは潮州系華人が多く暮らすチャンタブリー県を制圧して軍隊を整え、アユタヤーに向かうも町が破壊されていたため、チャオプラヤー川下流のトンブリーに新王朝をたてた。タークシンは登位後、戦乱後の疲弊した経済を立て直すために、中国人のタイ移住を積極的に奨励した。特に彼と同郷の潮州華僑に対しては「チーン・ルアン（御用華僑）」として特権を与えた [石井 1999: 39-40]。タークシン王は交易収入を増大させるために、新興華人商人の経済活動を優遇し、ときに地方の政治的権力をも与えることで、王都に直結した港市ネットワークを作り上げようとした [黒田 2001: 168]。タークシン王の時代に、華人の一部がタイの中央権力中枢と密接に結びついたことを意味する。

タークシンを処刑してチャクリー王朝（1782- 現在）を打ち立てたラーマ1世（1737-1809, 在位 1782-1809）も中国人移民の血を引き継いでいる。ラーマ

2世(1767-1824, 在位 1809-1824)は1世王の姉と中国人との間に生まれた娘と結婚し、その子どもとしてラーマ4世(1804-1868, 在位 1851-1868)は生まれた。4世王と華人の側室との間にできた王女たちはラーマ5世(1853-1910, 在位 1868-1910)の正妻となり、その間にラーマ6世(1881-1925, 在位 1910-1925)とラーマ7世(1893-1941, 在位 1925-1935)が、そしてラーマ8世(1925-1946, 在位 1935-1946)とラーマ9世(1927-2016, 在位 1946-2016)の父が誕生した。その父は華人の孤児女性と結婚してラーマ8世とラーマ9世が生まれ[村嶋 2002: 37], ラーマ9世の長男としてラーマ10世(1952-現在, 在位 2016-現在)が存在している。

4 頭角を現した華人

1855年にイギリスとの間で締結されたパウリング条約は、タイに大量の中国人移民をもたらす契機をつくった。当時の東南アジアではヨーロッパ列強による植民地化がすすめられており、タイもその脅威に迫られていた。そこでタイは1855年から1856年にかけて、イギリスの他に、アメリカとフランスとも修好通商条約を結び、王室独占貿易を放棄したのであった。自由貿易へと移行したタイでは、精米業、製材業、造船業、錫鉱業、ゴム栽培業、鉄道・運河建設業、農産業などに従事する労働者の需要が高まり、中国人移民が多く流入するようになったのである。そのピークは1920年代におとずれた[王 2003]。

1955年のスキナーの推定では、タイの華人集団の内訳は、潮州系が56パーセント、客家系が16パーセント、海南系が12パーセント、広東系と福建系がそれぞれ7パーセント、その他が2パーセントとなっている[Skinner 1957]。当時も現在も、正確な数値を割り出せるわけではないが、タイ華人のおおよその構成比率を提示している。すくなくとも圧倒的多数が潮州系華人であることがわかる⁽¹⁰⁾。

末廣昭氏が作成した「タイ系財閥上位50家族・企業グループ」一覧は、タイにおける潮州系華人の存在感の大きさを知る上で大変貴重である。そこでな

移民が形作るタイ（シンポジウム）

されている順位付けは、1997年時点のタイ系企業のデータを整理し、グループごとに総資産、売上高、所有主家族が保有する株式の時価総額の合計値をもとに行われている。一覧に掲載されている「祖籍・原籍」の項目を見ると、そこで明示されているだけでも、およそ半数の24グループが潮州系華人によって占められていることがわかる〔末廣 2003〕。タイの財閥の特徴はオーナーの大半が華僑・華人であり、その家族が会社の所有と経営の双方を排他的に支配しており、政権と結びつくことで事業を拡大してきた点に見出せるという⁽¹¹⁾〔末廣・南原 1991〕。

1920年代後半から30年代にかけて精米・コメ輸出の分野で形成された「コメ財閥」の代表格ワンリー/プーンポン・グループ（ワンリー家が中心、第25位）、1940年代から50年代に展開した金融財閥の代表格バンコク銀行グループ（ソーボンパニット家が中心、第1位）やアユタヤ銀行グループ（ラッタナラック家が中心、第5位）、1960年代から70年代にかけて台頭した製造業財閥の代表格サハ・グループ（チョークワッタナー家が中心、第24位）、1970年代後半から急成長を遂げたアグリビジネス財閥の代表格CPグループ（チャラワノン家、第9位）はすべて、潮州系華人に源流を遡ることができる。

ここでは、2016年7月に日本経済新聞紙上で30回にわたり掲載された「私の履歴書」から、CPグループ会長のタニン・チャラワノンの半生を振り返ることで、潮州系華人のファミリービジネスの展開過程についての一例を確認したい〔チャラワノン 2016〕。

タニンの父である謝易初は潮州で1896年に生まれた。謝易初は10代半ばにして祖父を亡くしたあと、野菜の種を売る商売を始めた。1919年前後に親戚をつてにタイへ渡った謝易初はバンコクの中華街に腰を落ち着け、1921年に「正大荘」という店を開いた。そこでは白菜、からし菜、カブの種を販売し、品質第一と顧客重視をモットーに事業を拡大させていった。謝易初は英語もタイ語もまともに話せなかったが、通訳兼渉外担当の英人を雇用することで外国企業とも取引を行い、国際企業の仲間入りを果たした。

タニンは1939年に生まれる。家庭内では潮州語が用いられていた。華僑が

開いた小学校に1年間通ったあと、キリスト教系の寄宿制小学校に通い、タイ語の世界にどっぷり浸かった。11歳の頃、中国のスワトー（汕頭）で品種改良に専心していた父の誘いでタイを離れることになる。スワトー到着後は、小学校4年生のクラスに編入し、漢字と標準中国語（北京語）の勉強に四苦八苦した。中学一年生までスワトーにいたあとは広州、それから香港に移動し、広東語と英語を学んだ。その頃中国では共産党政府が私有制経済を否定するようになり、父の財産はすべて没収されることになった。タニン（Tanin）は父にオーストラリアへの留学をすすめられるが断り、タイへ戻ることにした。「正大荘」はCPグループとして中堅企業に成長しており、そこで下働きから始めた。このとき、タニンは18歳である。

実家の企業にて2人の兄のもとで2年ほど働いたあと、タイ政府傘下の協同組合に幹部として就職して輸出部門を担当した。20歳で鶏などの食肉処理を一手に管理する仕事を任せられ、21歳のときに日本に出向いて脱毛機を購入することもあった。社会情勢が不安定になりタイ政府が協同組合を解散して、25歳のときに失業した。その後実家に戻り、次兄に代わって社長職を譲り受け、飼料事業を統括することになった。会社が大きくなるにつれて、経営組織の見直しをはかるようになった。それは、一言でいえば資本と経営の分離である。家族の対立による事業衰退を懸念して、家族を経営から遠のかせるという方針をとった。それまで経営に携わっていた家族には株主になってもらい、タニンが経営の陣頭指揮を執るようになった。1969年、30歳のときに長兄の命により総裁となった。

1970年頃、取引関係にあった米チェース・マンハッタン銀行（現JPモルガン・チェース）の紹介で、ブロイラーの種鶏事業では米最大手のアーバーエーカーの事業を視察し、当時その経営にあっていたロックフェラー家との間でCPグループとの提携を結んだ。米からブロイラーのヒナを輸入し、飼育農家の手配、飼料工場や解体するための食肉工場の整備を70年代後半までに行った。

1978年に中国が対外開放政策に転じたのを機に、79年末に20年ぶりに中国大陸へ向かい、80年に父の友人である政府高官と商談を行った。そして、外

移民が形作るタイ（シンポジウム）

国企業として深圳最初の投資認可が下りることとなった。その後もゆかりのあるスワトー、広州、珠海へと事業を広げていった。1980年代にはバイクや自動車の新事業にも着手し、85年にはエビ（ブラックタイガー）養殖を導入した。80年代広範にセブンイレブン（コンビニエンスストア）やロータス（スーパー）といった小売り業、また90年には電話事業にも乗り出した。1997年の通貨危機後に大打撃を受けていくつかの事業を手放したが、農業・食品、通信、小売の3事業に経営資源を集中することで、ファミリービジネスは再び急成長の波に乗っている状況である。

表1 CP（チャルーンポカパン）グループの主な事業

年	主な事業内容
1921	タニンの父がバンコク中華街に農産物輸出入商店の正大荘を開く
1950年代	タニンがCPグループの事業に参加する
1967	飼料製造業に着手
1970	米アーバーエーカー・タイを興し、鶏原種を輸入する
1973	素ヒナの生産とブロイラー処理に着手
1977	ブロイラー加工販売に着手
1981	中国で飼料・畜産業を開始
1984	オートバイを上海で生産開始
1985	三菱商事と合弁でブラックタイガーの養殖事業に着手
1988	コンビニエンスストアの米セブンイレブンと提携
1989	卸売業のサイアム・マクロを設立し、スーパーマーケットのロータスを展開
1990	海外パートナーと提携して電話回線事業に着手

[平野 2008: 120-139] を参照して作成

5 おわりに

本稿では、中国人移民がどのようにしてタイへと至るようになったのか、また中国人の血筋を継ぐ著名なタイ人にどのような人物がいるのかを紹介した。12世紀頃から華商が海を渡り、旅先の港で航海に適切な風が吹くのを待つなかで、各地に中国人居留地が形成されていったと考えられている。華商が求めるものは東南アジアで産出される香辛料や材木などの一次産品であった。朝貢と

呼ばれる政府による正式な交易とは別に、地元の商人が外国の商人と私的な貿易を繰り返していた。アユタヤも貿易商人を惹きつける港の一つであり、そこに腰を落着けた中国人移民と現地女性との間で混血がすすんだ。中国人移民の子孫のなかには国王になったり、財閥を築いたりする人もあらわれた⁽¹²⁾。

その内容だけを見ると、タイに移住した華僑・華人すべてが「成功者」にのぼりつめたかのように錯覚してしまうが、実際には表舞台に出ない無数の人びとが存在する。中国人移民のなかには、移住の地で商いがうまくいかなかった人や、苦力（クーリー）として肉体労働で酷使されて体を壊した人もいるだろう。現在では、街中ですれ違うあらゆる人たちが中国人の血を引いている可能性があり、そうした市井の人びとが社会を築き上げている⁽¹³⁾。たとえ歴史教科書に名前が載らなくとも、中国語の読み書きができなくとも、彼らのなかに中国人移民の血が脈々と流れているのである。名の知れ渡った華僑・華人とそうでない華僑・華人によって、タイ社会の一部分は形作られている。

注

- (1) 東南アジアにおける中国出身者およびその子孫に関しては、国籍の所属先を問わず、華僑を用いずに華人で統一して呼称することがある。華僑の「僑」の字には「仮住まい」という含意があり、移住先に生活の基盤を置く中国人に対しては華人がより正しいという主張に基づいている。またタイでは、華僑という言葉が必ずしも非タイ国籍保持者に対して用いられるわけではないことから、あえて華僑華人という表記を選ぶ研究者もいる [cf. 片岡 2014a]。
- (2) 「海水の至る所に華僑あり」で想定されているのは、船上に乗り込んで移動する 20 世紀中頃までの中国人である。現在では交通網の発達により車や列車、それに飛行機を乗り継いで移動する人が多い。中国の改革開放政策（1978 年）以前に外国に移住した「老華僑」と、それ以降に移動した「新華僑」を分けて捉える考え方もある [譚・劉 2008]。近年、ラオスでは陸路で渡ってくる新華僑が急増している。
- (3) 永楽帝の治世下（1402-1424）は、明代で最も東南アジアへの関心が高かった時代であり、朝貢による交易が推進されていた。鄭和の大艦隊による航海は、国の威信を世界にしらしめ、朝貢貿易の対象国を増やすことが目的であったといわれる。

移民が形作るタイ（シンポジウム）

- (4) トメ・ピレス[1966]は、アユタヤーには中国人のほかにもアラビア人やペルシャ人など多くの商人がいたことを伝えている。その内容は、トメ・ピレスが1512年から1515年に滞在していたマラッカで伝聞したものと考えられている。
- (5) 16世紀後半、広東・福建一帯で海賊としてその名をとどろかせた林動乾（Lim Tohkiam）は、明朝政府から目をつけられ、逃れるようにしてタイのパッターニーに移住した。その後パッターニーは華僑・華人の町として発展してきた。彼の妹である林姑娘（Lim Goniao）も兄を追ってパッターニーにやって来た中国人として有名である [SNG and Bisalputra 2015: 24-25]。
- (6) 17世紀前半は日本人町も賑わいを見せており、日本人町焼き討ちが起こった1630年以前の盛時で、1千から1千5百人の日本人がアユタヤーに暮らしていたという推計がある [岩城 1996]。その頃活躍した人物に、アユタヤーの日本人町で頭領（日本義勇隊長）となり、王女と結婚して高官となったといわれる山田長政がいる。しかし、彼の逸話は「大東亜共栄圏」構想が唱えられた南進論のなかで創作されたものであり、山田長政の存在自体すら怪しいという指摘がなされている [矢野 1991]。
- (7) 鄭鏞が中国を出国する少し前の1671年、鄭玖（Mac Cuu）という広東人が海を渡りカンボジアへ移住した。1700年に彼とその手下はハーティエン（Ha Tien）という複数の賭博場を擁する中国式の街を築いている。後年この街は、タークシンが手中におさめることになる。なお鄭鏞は、アユタヤーの賭博場で税を徴収する役人だったといわれる。ハーティエンについては、[北川 2001]に詳しい。
- (8) アユタヤー王朝は、1569年にビルマのタウングー朝に陥落させられており、独立を回復したのはそれから15年後の1584年である。そのことから、アユタヤー王朝は前期と後期に分けることができる。前期をアヨータヤー、後期をアユタヤー（またはアユッタヤー）として、明確に区別して捉えるべきとする意見もある [石井 1999]。
- (9) パナンチューン寺院は、アユタヤーの川中島の外側、チャオプラヤー川の南東岸に建てられている。チャオプラヤー川とロップリー川の合流点に位置する。大仏殿に禪定する本尊は地元のタイ人から「大師さま（ルアン・ポー・トー）」と呼ばれることが普通だが、華人のタイ人からは「三宝公（サムポーコン）」と呼ばれている。三宝公とは、中国明代に7度の大航海を行った鄭和を指す。タイ華人のなかには、鄭和こそが自らの先祖であることを信じて疑わない者もいる。また、この寺院には他にも中国式の廟があり、タイ人から「ネックレスをつけた皇女の廟」と呼ばれている。伝説上では中国の皇女がアユタヤー（ア

ヨーチャー王国ともいわれる)の国王に嫁いだが欲待されずに自殺し、その地に廟が建てられたといわれる。いずれのエピソードも、当時の中国人とタイ人との間で深い交流があったことを示唆している。

- (10) タイ全体では潮州系華人が多数を占めるが、地域によって異なる。例えば世界的な観光地であるブーケットには福建系華人が多く暮らす。旧海峡植民地(マラッカ、ペナン、シンガポール)のある南部マレー半島西岸部でも福建系華人の存在感が大きく、在地社会と混淆がすすんだババ・プラナカン文化と呼ばれる独自の категория が成立するようになっている。ババやプラナカンに関する詳細は、[片岡 2014b]、[篠崎 2017]、[太田 2018]を参照されたい。ヒトの動きにともない中国の食文化もタイに根を下ろしている。現在タイ料理として広く知られているクイッティアオ(米粉麺)やオースアン(牡蠣の卵とじ炒め)は潮州人が、ジョーク(お粥の一種)は広東人がタイに持ち込んだと考えられている。
- (11) その他にも、ワンセット型、コングロマリット型、関連産業型、金融・サービス型、サービス産業型という五分類を基に、コメ財閥、金融コングロマリット、製造業グループ、アグリビジネス・グループ、建設・不動産グループの5つに分類できることも特徴の一つに挙げられている [末廣・南原 1991: 9-10]。
- (12) 本稿では、主に潮州系華人を取り上げたが、他地域出身の子孫で有名な華人はたくさんいる。例えば、60以上のデパートやショッピングモールを展開するセントラル・グループ率いるジラーティワット(Chirathivat)家、それにレッドブルのオリジナルとなるエナジードリンクを生み出したユーウィッタヤー(Yoovidya)家は海南系華人である。第31代タイ首相(2001-2006)となったタックシンやその妹である第36代タイ首相(2011-2014)となったインラックのチナワット(Shinawatra)家は客家系華人である。
- (13) 近年、新たにタイへ移住する中国人が増えている。新華僑と呼ばれる人たちで、中華街(ヤワラート地区)から北東に8キロほど離れたホワイクワン地区に集住するようになった。その背景には、年々増え続ける中国人旅行者の存在がある。2017年にタイを訪れた外国人観光客数35,381,210人中、中国人は980万人超と4分の1強を占める。その中国人観光客を狙ったビジネスを立ち上げるために、新華僑が急増しているのである。

参考文献

- チャラワノン, タニン, 2016「私の履歴書」日本経済新聞, 2016年7月1日～7月31日。
- 張長平, 2009「華人の世界分布と地域分析」『国際地域学研究』12: 57-72。
- 平野實, 2008『アジアの華人企業 南洋の小龍たち: タイ・マレーシア・インドネシアを中心に』白桃書房。
- 石井米雄, 1999『タイ近世史研究序説』岩波書店。
- 岩城成一, 1996『南洋日本町の研究』岩波書店。
- カセートシリ, チャーンウィット, 2007『アユタヤ』吉川利治訳, タイ国トヨタ財団。
- 片岡樹, 2014a「中国廟からみたタイ仏教論:南タイ, プーケットの事例を中心に」『アジア・アフリカ地域研究』14 (1): 1-42。
- 片岡樹, 2014b「想像の海峡植民地:現代タイ国のババ文化にみる同化と差異化」『年報タイ研究』14: 1-23。
- 北川香子, 2001「ハーティエン」池端雪穂ほか編『東南アジア近世国家群の展開』岩波書店, 189-209。
- 黒田景子, 2001「マレー半島の華人港市国家」池端雪穂ほか編『東南アジア近世国家群の展開』岩波書店, 161-187。
- 三留理男, 1999『華僑:海水の至る所に華僑あり』草の根出版会。
- 村嶋英治, 2002「タイにおける華僑・華人問題」『アジア太平洋討究』4: 33-47。
- 根津清, 1994『客家:最強の華僑集団』ダイヤモンド社。
- 周敏, 2009「華人国際移住の歴史的回顧と社会学的分析」55 (2): 23-41。
- 小川博編, 1998『中国人の南方見聞録:瀛涯勝覧』吉川弘文館。
- 王柳蘭, 2003「タイの華人社会:変容する華人像」綾部恒雄・林行夫編『タイを知るための60章』明石書店, 130-135。
- 太田泰彦, 2018『プラナカン:東南アジアを動かす謎の民』日本経済新聞出版社。
- パン, リン編, 2012『世界華人エンサイクロペディア』游仲勳監訳, 明石書店。
- ピレス, トメ, 1966『東方諸国記』生田滋訳, 岩波書店。
- リード, アンソニー, 2002『大航海時代の東南アジアII』平野秀秋・田中優子訳, 法政大学出版局。
- 斯波義信, 1995『華僑』岩波書店。
- 篠崎香織, 2017『プラナカンの誕生:海峡植民地ペナンの華人と政治参加』九州大学出版会。
- Skinner, G. William. 1957. Chinese Society in Thailand: An Analytical History. Cornell University Press.

SNG, Jeffery and Bisalputra, Pimpraphai. 2015. A History of the Thai-Chinese. Editions Didier Millet.

譚璐美・劉傑, 2008『新華僑・老華僑：変容する日本の中国人社会』文藝春秋。

Trocki, Carl. 1997 “Chinese Pioneering in Eighteenth-Century Southeast Asia” in Reid, Anthony, ed., *The Last Stand of Asian Autonomies, Response of Modernity in the Divers States of Southeast Asia and Korea, 1750-1900*. MacMillan Press, pp. 83-101.

矢野暢, 1999『『山田長政』神話の虚妄』矢野暢編『東南アジアと日本』弘文堂, 64-86。

末廣昭・南原真, 1991『タイの財閥：ファミリービジネスと経営改革』同文館。

末廣昭, 2003「タイの財閥：華人系の進出」綾部恒雄・林行夫編『タイを知るための60章』明石書店, 102-107。